
できれば、もう一度

蒼惟 宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

できれば、もう一度

【Nコード】

N5065D

【作者名】

蒼惟 宙

【あらすじ】

優士と思依茄は幼馴染で大の仲良し。幼い頃から虐待を受けていた思依茄は必死にそれを隠していたが、優士はそんな思依茄に気づき、守りたいという気持ちと同時にもう一つの気持ちにも気づいていく……。

ブローグ

しなちゃんが好きなもの。グレープフルーツの香り、小さなブルーの花を付ける植物、泣ける話、漫画、季節を感じる匂いe t c…
しなちゃんが嫌いなもの。嘘、お世辞、汚い部屋、いじめ、酔っぱい食べ物e t c…

これは僕の頭の中にある、しなちゃんの情報の一部。僕はこの情報を、十年経った今も大切にしている。

しなちゃんは強い。

どんな事があっても、誰にも頼らず、自分を信じて乗り越える。あまり泣いたりしない。そんな光り輝くしなちゃんを、僕はいつも尊敬と同情の眼差しで見つめている。しなちゃんには、とても辛い過去がある。誰にも癒す事の出来ない底無しの傷が…。

しなちゃんは、僕の大切な人だ。

僕としなちゃんは、いつも面と向かって話しをする。その日の愚痴なんかを、たくさん打ち明ける。それを、しなちゃんは飽きもせず、毎日毎日ちゃんと聞いてくれる。それが僕にとってどれだけ大切なことなのかは、僕以外の誰にも分からない。他の人に分かるわけが無い。僕だから分かるのだ。

今僕は、しなちゃんのことを守りたいと思っている。軽い気持ちなんじゃない。

それが僕の真実だ。

第一話 優士と思依茄

季節は春。さまざまな人が気持ちをリセットして、新たな生活をスタートさせるとても気持ちの良い季節だ。花が咲き乱れ、空気は一定に動いていて心地よい気温を保ちながらも、まだ吸い込む空気が吹き付けてくる風には、冬の欠片が残っている。

私の幼なじみ、古座巳優士（うづめ せいし）と私 草田思依茄（くさだしな）の中学校では、二週間ほど前に新入生を迎えた。私達二年生もみんなそれぞれ落ち着き、授業も始まった。

進級した私達は、去年よりも少し大人っぽくなったねと、近所の人たちに言われた。でも、私にはどのあたりがどう大人っぽいのかよく分からなかったが、とりあえず勉強が難しくなったということと言える。

「思依茄ちゃん、お願いがあるの！」

ある春の日の放課後、私が部活に行く用意をしていると、同じくクラス（かみおか）の神陸さんに声をかけられた。神陸さんは薄い茶色の天然パーマの髪で、モデルのような抜群のスタイルに、整った容姿をしているおっとりとした子だ。

「ん？どうした、神陸さん。」

私が言うと、彼女は何故かパー…と顔を赤くした。私が首を傾げると、

「…君に、こ…渡して…んじを、もらって…しいの。」

神陸さんは俯いて、もじもじしながらとても小さな声で言った。所々聞こえない箇所があったので、私は「ごめん、もう一回言ってくれるか？」と言った。神陸さんは少し迷っていたようだが、やがて決心したように私の眼を見つめると、さっと自分の手に提げていた通学カバンから黄色い封筒を差し出した。

「古座巳君にこの手紙を渡して、返事をもらってきて欲しいの。」
神陸さんは、今度は普通の大きさの声ではっきりと言った。私は一

瞬意味が呑み込めなかったが、封筒を受け取った瞬間に「ああ……」と納得した。

「優士にこの手紙を渡して、付き合ってくれるかどうか返事を聞けばいいんだな？」

私は確認する為に、誰も周りにいないかを確かめてから、それでもなるべく小さめの声で言った。神陸さんはコクンと頷くと、安心したのかフウとため息をついて微笑んだ。神陸さんが微笑むと、私はなんとなく癒される。

「やっぱり思依茄ちゃんに頼んで良かったあ。私、思依茄ちゃんなら絶対に、手紙を見たりしないって自分に言い聞かしていたんだけど、やっぱり少しだけ不安になっちゃって……」

さっきも言ったが、さえちゃんはともおっとりしているので、所々切りながら喋る。

「でも、思依茄ちゃん古座巳君の幼なじみだから大丈夫だと思って頼んだの。私が古座巳君を好きな気持ち、伝えて来てね。」

「……。」

どうしてこう『好き』と簡単に言ってしまうんだろう。まあ、私のたった一人の親友も、そういうヒトだけど……。

「でも神陸さん、どうして自分で渡さないんだ？」

私は神陸さんに言った。

「まあ、ホントに思依茄ちゃんは天然なんだから……恥ずかしいからに決まってるじゃない！」

神陸さんはブツブツと言ってから、気を取り直した様にカバンを持ち直し、スタスタと教室から出ていった。

私はまだ頭の上に？があったが、荷物を持って、彼女の後から教室を出た。

柔道の活動場所である道場は、体育館の二階にある。夏は猛暑で倒れる人が続発するし、冬は寒くて、畳に足をつけていけない。柔道部は、この中学校にある部活の中でも最も過酷な部活の一つだと思う。特に部室は強烈。僕としなちゃんはもうこの匂いには慣れてしまったけれど、大抵の人は鼻が曲がると言ってひいてしまう。

柔道部は毎年廃部ぎりぎりの人数で、部室は僕たち新二年生二人が占めている。五人ほど新一年生が入ったが、この部室では着替えたがらないので結果的に僕たち二人になる。三年生は、早めに部活を引退してしまった。

僕が、一人部室で着替え終えて部室に五つ並べて置かれているパイプ椅子に腰掛け、今日の授業の復習をしていると、いつもより十分ほど遅れて、しなちゃんが来た。

「やつほー！また勉強か？！」

しなちゃんが僕の右手側の後ろから肩をポンツと叩いて、元気良く言った。

「今日は遅かったんだね。」

僕はよっこらしよと言いながら立ち上がると、足元に置いている通学カバンのジッパーを開けて教科書を閉まいながら言った。すると、ロッカーにカバンやら何やらを詰め込んでいたしなちゃんが、勢い良く僕の方を振り返った。

「な、なに？」

それを見た僕は、思わず眼を丸くしてしまった。しなちゃんは男つてやつは…と言いながら再びロッカーに向き直り、着替え始めた。

僕たちは小さい頃から今までずっと、着替えは同じ部屋だ。

「うっそ、マジで?!この歳になっても?!恥かしくないのか?!」この事を知った人達は皆こう言うが、僕たちは今までに一度も恥ずかしいなどと思ったことは無い。

着替え終わると、僕たちは残りの部員五人を呼び集め、練習を始めた。日の光が当たっていた畳は、とても暖かくて気持ちが良いと、僕は思った。

部活が終わって帰る仕度をし、外に出ると、もう辺りはすっかり暗くなっていた。春だと言っても、夜はまだ寒い。僕としなちゃん、震えながら帰り道を歩いていた。

僕達は、学校から帰る時必ず商店街を通ることになっている。最近は物騒なので、なるべく人が多い所を通るようにしているのだ。

煌く夕陽の欠片も完全に地平線の向こうに姿を隠した五時四十分頃、私と優士は家路に着いた。赤レンガの壁にこげ茶色の屋根という感じの同じ二階建ての家が、二組ずつ、六軒ほどズラッと並んでいる所だ。それぞれお隣同士が、会っても無くても良いような短い渡り廊下で繋がっている。

私たちは小さい時からお隣同士で、私達が家から徒歩三分ほどの保育園に入園すると、どちらの親も仕事に復帰した。寂しくなった私達は、毎日のように互いの家に遊びにいった。もちろん今でもそうだけだ…

一旦自分の家に帰ってから、着替えが速い方が先に相手の家に勝手に上がり込む。そして相手の部屋に行って話をしたりする。

これが私達の毎日。

これがどれだけ私にとって大切なことか、私以外の誰にも分からない。私には毎日ご飯を食べたり、寝たりすることと同じくらい大切なんだ。

私は部屋に駆け込みカバンを放り出し猛スピードで着替えてサンダルを引っかけると、鍵をかけて優士の家に飛び込んだ。

ああ……優士の匂い。

私はこの柔らかな懐かしい匂いを、いつも肺が満タンになるまで吸い込んで幸せな気持ちになる。私が、世界で一番好きな匂い。

二階にある優士の部屋は散らかっている。でも、足の踏み場が無い

ほど、という訳ではない。棚や机、ベッドの上が少しゴチャゴチャとしていただけだ。それでも、私から見たらやっぱり散らかってる。私は、汚い部屋があんまり好きじゃない。

「いらっしやい。はい、アイスカフェオレ。」

優士の部屋に入ってワインカラーの敷物が敷かれた床に座っていると、涼しい音を鳴らしながら優士が入ってきて、私にバニラアイスの乗ったカフェオレが注がれているグラスを差し出した。私が礼を言ってそれを受け取ると、優士は部屋のドアをガチャツと閉めて、私の向かいに座った。

「しなちゃん、それ…なに？」

「ん？」

優士はアイスカフェオレを一口飲んでから、私の鞆から飛び出している黄色の物に気がついて言った。私はあつ、そうかと思い出して「はい」と優士に、神陸さんから預かった封筒を手渡した。

「ラブレター。」

私はそう言つと、グラスに刺さっていたスプーンでアイスを一口食べた。

「Dear二年三組 古座巳 優士、From二年一組 神陸 紗枝さん。読んであげたら？」私は優士にスプーンを向けて言った。

優士はふーんと言いながら封筒から中身を取り出し、広げた。私はそれを見つめていた。

が、その時、突然不安な気持ちが私を襲った。私はとても驚いた。今までにも、優士は何回かラブレターをもらったりしていたし、私は頼まれて手紙を渡した事も何回がある。それなのに……何故か身体が震え、それから今まで思ったことも無いような言葉が頭を埋め尽くした。

僕が手紙を折りたたんで封筒に入れながらしなちゃんを見ると、僕の方に顔を向けて、じっとしていた。目は、どこか遠くを見ている様だった。

「しなちゃん？」

僕は声をかけてみたが、しなちゃんはピクリとも動かなかった。今度は、軽くしなちゃんの肩をポンポンと叩いてみた。

「……！！」

しなちゃんは顔を真っ赤にして、眼を見開いて僕のことを不思議そうに見た。その顔がほんの少し可笑しかったので、僕はクスツと吹き出してしまった。

「はい、読んだよ。……ごめんって言うてくれるかな。」

僕はそう言って、手紙を机の引き出しに入れた。

「……ったく、どうしてみんな私に任せるんだ？返事なんて自分で言えればいいじゃないか。」僕が座り直すと、しなちゃんはスプーンでアイスをつつきながら口を尖らして、ぶつぶつとそんな事を言っていた。僕はそんなしなちゃんがとても可愛いと、心から思った。

「コップ、下げてくるよ。」

グラスを二つ持って、僕は部屋を出た所にある台所のカウンターにコップを置くと、すぐに部屋に引き返した。

僕が部屋のドアを開けると、しなちゃんはクローゼットにもたれて座っていた。それだけならまだ良い。しかし、よく見るとしなちゃんは泣いていた。声も出さず、鼻も嚙らず、ただ両目から涙を流して……。

僕は驚いてしなちゃんの側に膝をつくと、しなちゃんの名前を何度も呼んだ。

やっとしなちゃんがこっちを向いた。目が充血していて、身体が少し震えていた。しなちゃんはいしばらく何が起きたのか分からない様子だったが、肩に置いた僕の手を払いのけて、ベッドの方にズリズリと後ずさりした。

「しなちゃん」

「ご、ごめん。なんでもないの。どうしたんだろう私…」

しなちゃんは恥ずかしそうに俯いてから、もう一度僕の眼を見てな
んでも無いよと笑った。いつものしなちゃんじゃない。いつもの男
の子っぽい喋り方じゃない。

「しなちゃん、泣いてるよ？」

僕はますます不安になってしなちゃんに近寄り、しなちゃんの頬に
涙でへばり付いている髪を取ろうと思い、手を伸ばした。ビクツと
しなちゃんの体が揺れた。眼に光が射していなくて、何だか真っ黒
に見えた。

「あつ、ああ！もうこんな時間！！家に帰らないと…」

そう言つとさつと立ち上がった、しなちゃんはご馳走様！また明日
ねと、僕の部屋を走り去った。

玄関のドアがガチャンと閉まった。僕はどうしようもなくて、ただ
そこで手を宙にさまよわせながら座っていた。

しなちゃん、どうしたの？僕、しなちゃんが泣いたところ初めて見
たよ…何かあったの？もし良かったら僕に話して……

僕の心の中に、今ごろになってこんな言葉が出てきた。僕は、自分
が嫌になった。

第二話 しなちゃんの家庭事情

優士の部屋で起こったちょっとしたことから、すでに4週間以上が経過していた。春はもうすぐ終わり、梅雨の時期に入ろうとしていた。

そして私達は今、学期末テストの為に（私だけ猛）勉強していた。

「もおぜえつつつつたい無理!!」

私はそう叫んでから、きちんと整えられたアイボリー色のシーツを被せられたベッドにボツツと頭を乗せた。

一時頃、学校が終わって家に帰ると、私は勉強しなければいけないというプレッシャーにだるさを感じながら、くだらなく服を着替え、勉強道具を持つと優士の家に侵入した。そして、あまりにも散らかった優士の部屋を、二人で大掃除をしたところだ。

私は目の前にあるオレンジジュースの入ったグラスを持って、右横にある窓から射し込んでくる日の光を当てた。そんな私を見て、優士は仕方なさそうにフーとため息をついた。でも、怒っているのではないと思う。だって顔が笑っているもの…。

「あのねえしなちゃん。早過ぎるよ、音を上げるのが…。しなちゃんが勉強嫌いなのは知ってるけどさ…。好きな教科とか、無いの？」私は思いつき優士を睨んでやった。

「優士は何でも得意だからね、そんな事が言えるんだ。好きな教科なんか無い!」

私がほっぺを膨らますと、優士は声を上げて笑った。私はふんつとノートに向き直り、教科書の単語を書き写し始めた。すると、突然優士がそつと言った。

「僕にもね、嫌いなものがあるよ。」

優士が、じつと私の顔を見る。

「え、そうなのか？何だ、それ？」

私も、優士の綺麗な顔を見返す。

「女の子。」

優士の口元が、ふっと優しくなった。

「?????はい?じゃあ好きなのは?昆虫とか?」

私はそんな優士のちよつとした表情になんだかドキドキしてしまう。
最近、私はどうかしてる…

「しなちゃんだよ。」

優士は何の躊躇いもなく、私の眼を真っ直ぐ見て言った。昔からそうなんだ、優士は。

「……。」

私は恥かしいの域を通り越して、呆れてしまう。優士は『好き』とか『僕の大切な親友』だとか、そういう事スラっと言ってしまう。どうしてそんな風に、軽々と言っちゃうんだろ?私は、そういう言葉は大切にしまっておきたい方なのだ。だって、声に出したら無くなってしまいそうで…嫌だから……

「はいはいそうですか?。ありがと!」

私はシャーペン握り直すと再び勉強との戦いを再開した。優士はクスクスと笑っていたが、やがて静かになった。たぶん勉強を再開したのだろう。

それからしばらくして、私は何となくあたりが暗くなったのを感じ、ふっと顔を上げた。壁に掛けてある振り子時計は、長身と短針が『6』を指していた。鉛の様に重くなってきた瞼が、一瞬で風船のように軽くなった。

「うわあっ!どうしよう!」

私が悲鳴を上げると、驚いてノートから顔を上げた優士が私の顔を眺めた。私はものすごい速さで勉強道具を片付けた。そして勉強道具を入れた手提げカバンを肩に下げて立ち上がり、啞然と私を見ている優士に「また明日ね」とだけ言って、いつかの時のように慌てて部屋から出ていった。

その瞬間、私はあの日のことを思い出した。私が優士の部屋で泣いてしまつて、慌てて帰ったあの日……私は母さんに殴られた。夕こ

はんを作るのが遅いからって。
もう……痛いのは慣れてるけどね。

テストまであと三日となった。しなちゃんの体力があとどのくらいもつのか、僕はとても不安だ。なぜなら、しなちゃんの顔色が最近青ざめているからだ。

今日は久しぶりにしなちゃんの家に行きたいなあと、下校途中に僕が言っと、それまで元気に話をしていたしなちゃんが急に怯えた顔になって、黙り込んでしまった。僕はそれがどうしてなのか聞こうかと思っただが、震えているしなちゃんを見て、止めにした。

「あ……の……しなちゃんが嫌だったら僕の家でもいいけどね。」

僕がそう言っと、しなちゃんはまだ少し震えていたが、すまなそうな顔をして僕の方を向いた。

「ありがとう。ごめんな。私の家、今模様替えしてるから……それで、散らかってるんだ。」しなちゃんは長くため息をつくとき、晴れ渡った空を仰いでまた黙り込んでしまった。

今のは、嘘だ

僕は即座にそう思った。

しなちゃんは滅多に嘘をつかない。それでも嘘をつく時は、ずっと自分の腕を握り締めているので、腕に爪の型が残る。しなちゃんは嘘が嫌いだから、たぶん嘘をつく時、自分で自分を罰しているんだろう……。僕はそんなしなちゃんに、小さい頃からある疑問を抱いていた。それは、しなちゃんが僕の家で遊んでいて、六時半になると逃げるように帰る。そして次の日、口の端が切れていたり手の甲に切り傷が出来ていたりする。その度にしなちゃんは「転んじやったんだ」とか、「今乾燥してるだろ？だから唇が割れちゃったんだよね」とか、そんな理由を僕に言っていた。大丈夫だよって……

その言葉の数だけ、しなちゃんの腕は傷だらけになっていった。

僕は中学に入学するくらいまでその『嘘』を信じることにしていたけれど、さすがに最近はそうもいかない。しなちゃんの傷は増える一方だ。元気な振りをしているけど……

「しなちゃん……」

本当に大丈夫なの？僕に一体何を隠しているの？

「ん？何だ？」

しなちゃんは、赤茶色の瞳のパッチリした眼を僕の顔に一直線に向けて明るい、いつもの声で応じてくれた。

「今日のおやつ、チョコミントアイスだよ。」

「うおっ、マジか！やったー！！」

ああ神様、どうかこれ以上しなちゃんに何も起きませんように。僕の嫌な予感が外れますように……

やっとテストが終わった！私は喜びのあまり、自分の部屋で鼻歌を歌っていた。

さつき優士の家で、テストの点数を公表した。優士先生のおかげで、私の成績は良かった。全て80点以上！！

しかし、そう長く喜びに浸かっていることはできない。私は今から悪魔の為に夕飯を作らなければならないのだ。奴が帰ってくるのは七時。今は六時二十五分なので、まだこの前よりは余裕がある。まあ殴られずに済むだろう。

この前はまだご飯が炊けていないというだけで、傘で腰を叩かれた。軽くじゃ無い。バットを思いっきり振るように叩いた。私はそれを手でガードしたので、幸い甲に裂傷が出来ただけで済んだ。これなら、優士になんとか言い訳がたつ。

母さんは、私を貶したり殴ったりするのが好きらしい。ストレス発

散にでもなるのだろうか？もう慣れたからいいけど、最近人に触られるとつい手を払ってしまう。だから、同じクラスの子達はあまり私に近づかないようになった。

ガツ…チャ

あ、帰ってきた！今日はあつという間にご飯が出来ちゃった。やっぱり優士の作ってくれたヨーグルトシェイクのパワーかな？

「お帰りなさい、お母さん。」

私はエプロン姿のまま、居間で母さんを迎えた。でも、今日は母さん一人じゃなかった。

「ただいま。思依茄、今日はお客様がいるのよ。」

その言葉に、私は母さんの隣に立っている、170cmくらいのハンサムな男性に顔を向けた。筋肉質でスリムな見た目とは反対に、短い髪はとても柔らかそうで、瞳は茶色をしていた。

「この人は私のお友達なの。」

母さんはその人と顔を見合わせて、ニコツと微笑んだ。たぶん、この人はお母さんの容姿に目がいったんだろう。お母さんは美人だからなあ…。性格は殺人者だけど。

「こんばんは。」

私がペコリと頭を下げると、その人は私の前に進み出て大きな手を差し出した。その人は私に、とても優しい笑みを浮かべてくれた。

「私は御前おんまえと言います。よろしくね」

そう名乗った彼は、私と握手をした。

それから私はテーブルに、母さんの分と彼の分のご飯を出し、いつも私が座っている椅子に御前さんを座らせた。

「君は食べないのかい？」

御前さんは席に座ると、私にそう言ってくれた。私はその心配そうな顔と声に、何か懐かしさのようなものを感じて嬉しくなりながらも、

「あ、大丈夫です。私、実は先に食べてしまったんです。だから、どうぞ食べてください。」と言った。御前さんは疑いもせず笑っ

た。

「そう、……ありがとう」

私は、チラッと母さんの顔を見た。母さんは私に目で「早く引き下がらなさい。」と言っていたので、私は御前さんにもう一度挨拶をしてから、鳴りそうになるお腹を押えて早歩きで自分の部屋に戻った。そしてベッドに倒れ込んだ。

ベランダ越しに繋がっている優士の部屋から、格闘ゲームの様な電子音が聞こえていた。私はその時、優士のことをものすごく恨めしく感じた。

しなちゃんが僕の家に来なくなった。

それが始まったのは、夏休みになる少し前からだ。学校も休んでいるから、もうかれこれ一週間と三日会っていない。

四日目になる今日の朝、僕が駅に向かう旭を見送っていると、向かいのドアからしなちゃんのお母さんが出てきた。僕は桃花さんを二年ぶりに見たけれど、相変わらず綺麗な人だと思った。桃花さんももかは僕に気がつくと、スタスタと歩み寄ってきて「おはよう」と言った。

「久しぶりね、優士君。二年ぶり……かしら？いつも思依茄と仲良くしてくれて、どうもありがとう。あら、古座巳さんは、もう行ってしまったのね。」

そう言うて腰まであるライトブラウンのストレートヘアを風になびかせながら微笑んだ。

「あ、はい。それより桃花さん、しなちゃん、大丈夫ですか？最近見かけないんですけど。」僕がずっと思っていた事を聞くと、おばさんの体が、ほんの少しだがビクッと揺れた。僕はそれを見逃さなかった。おかしい……。

「思依茄ね、風邪ひいちゃったみたいなの。あ、家に鍵を掛けてお

くの忘れちゃった。鍵はっど……」

おばさんは、最後の方を独り言の様に呟きながら自分の家に鍵を掛けた。

「それじゃ、またね優士君。」そう言っておばさんは駅に向かって、さっそうと歩いていった。

僕の背中に冷や汗が流れた。頭の中に嫌な映像が浮かんだ……………

まさか！

僕は火の元と水道を確認してすべての窓の鍵を閉めると、二階にある自分の部屋に駆け上がって、小学生の頃にしなちゃんがプレゼントだと言ってくれた、しなちゃんの家の特アキーを必死で探した。クソッ……どこだ！

やっと引き出しの奥に見つけると、転がるように階段を駆け降りて自分の家の玄関の鍵を閉めてから、さっきおばさんが閉めたドアに飛びついて鍵を開けた。

「……………」

真っ暗だ。何の音も無い。空中に漂う微小の埃までもが、止ってしまっているようだった。家中のカーテンが閉まっている。僕は念の為に内側から鍵を閉めた。一階を探す必要はないような気がして、僕は手探りで階段まで辿り着き、できるだけ音をたてずに登った。二階に到着してもまだ暗かったが、目が慣れてきたのかだんだん周りが見えるようになってきた。

先に進むもつとしたその時、何かが足に当たった。僕は心臓が止まりそうになるほど驚いたが、何とか声を抑えた。よく見ると、ものすごい量のゴミがぎっしり詰った袋らしき物体が、廊下を埋め尽くしていた。僕はその隙間をつま先立ちで進んだ。

とうとうしなちゃんの部屋に着いた。

(……………え。)

僕の脳は、目の前の光景を受け入れることを拒否した。しなちゃんの部屋のドアの前に、筆筒やソファなどの家具が幾つか積んであ

たのだ。僕は順番に邪魔物を退かすと、恐る恐る部屋のドアを開けた。

何にも無い

しんちゃんの部屋か……懐かしいなあ。僕が感傷に浸っているとぐしゃぐしゃになったシーツやクッションが山積みになったベッドの上で、何かが動く気配を感じた。

驚いたが、意を決してベッドに近づき、バツと山を崩すと、そこには真っ青になって、だいぶ痩せてしまっているしなちゃんが、私服のままで横たわっていた。顔、体中に傷や痣がある。僕の頭の中が、真っ白になった。

「しなちゃん！思依茄？！」

僕は急いでしなちゃんを抱き起こし、ベッドから降ろした。そしてしなちゃんの体を支えながら、一緒に床に座った。

しなちゃんはいばらくすると、薄く目を開けて、ゆっくりと首を横に向けて僕を見た。

「しなちゃん？！目が覚めたんだね、良かったあ……。しなちゃん、今から僕の家に行こう。」

僕の目に、涙が溜まった。しなちゃんを背中に乗せると、すぐに僕の家に帰った。

僕はしなちゃんを自分の部屋に運び入れると、彼女に座れるかどうか聞いた。しなちゃんが頷いたので、すぐにベッドに座らせて部屋を出て行き、コップにお茶を並々と注いで戻った。しなちゃんはそれを受け取ってゴクゴクと飲んだ。

「しなちゃん、何か食べたい物ある？」

僕はしなちゃんの隣に座って言った。しなちゃんはどうしようか考えているようだったが、しばらくして「何でも良いよ」と言った。ぼくはおかゆを作ってあげた。しなちゃんはすぐに全部食べてしまった。

「しなちゃん、聞いてもいい？」

「……。」

しなちゃんはガクンと、頭を力無く落として頷いた。

「何日ご飯食べてなかったの？」

「……三日くらい」

「……っ?!」

僕は絶句してしまった。

「母さんにね、彼氏が出来たの。何回か遊びに来たのよ。」

しなちゃんはフフと笑ってそう言った。僕はどう答えていいのか、頭の中をグルグルと掻き混ぜてみた。僕がしなちゃんの顔を見ると、しなちゃんも僕を見て、まだ微笑んでいた。

その笑顔は、僕の心を抉った。僕は、しなちゃんに対して、可哀想以上に何か空しいものを感じてしまった。僕は、どうすればいいんだろう?どうすれば

「すごく優しい人なの。その人が十日前に一人で家に来て言ったの。僕は、君のお母さんよりも君のことが好きなんだって……。どうして急にそんな事言い出したんだろうね、あの人。私、口が動かなかった。だって、何時の間にか後ろにお母さんがいたんだもの。その人は、母さんに追い出されて帰っていった。母さん、すごく怖い顔で私のことを見て……。あんたなんか、私が殺してやるっ!何回あんたが消えてくれたら良いって思った事か。あんたを今まで殺さなかったのは、これからの私の人生が台無しになった困るからよ。でも、隠せば良いわ。そうよ、どうして隠すって事を考えなかったのかしら。そうすれば、私には何の影響も無いわ!あんたはもういらない。だから、死になさい!……: そう言いながら私をいろんな物で何度も殴ってたわ。他にも何か言ってたけど、気を失いそうになってたから分からなかった。それで、まあ何とか今日まで生き延びて、優士に助けられた……。優士は、命の恩人だよ。ありがとう。」

しなちゃんはそれだけのことを、息もつかずに一気に喋った。目に涙はない。僕はしなちゃんに何も答えてあげられなかった。どうしてこんな事になっちゃったんだ?僕は何を見てたんだ?

「僕って馬鹿だよ。僕はしなちゃんのこと何にも知らなかった。今

だつて何も……」

何時の間にか、心の叫びは口から流れ出していた。しなちゃんは僕の顔を、まだ光の消えていない目で見据えて言った。

「私、優士の側にいて、生きてて良かったと思ってるよ……」

開放した窓から吹き込む風が、しなちゃんの長い長い漆黒の髪を撫でていった。

第三話 夏の午前に吹く風を

私は特にすることも無く、夏の午前の風が優しく揺らす薄いカーテンを視界に入れながら、ボーツと外を見ていた。窓の外に、カーテンのかかっていない薄暗い部屋が見えた。殺風景な、私の部屋が。

「しなちゃん、どうしたの？ボーツとしちゃって。」

優士がアイスコーヒーの入ったグラスをテーブルに置き、私の隣に腰掛けた。私は首を振る。

「私の部屋を見てただけ。あそこに、一昨日まで倒れてて、死にかけてたなんて、信じられなくて。」

私は喋ることにも、たくさんの体力を使った。今は何をしても、疲れる。

優士に助けられて、私は今、彼の部屋で夏休みを過ごしている。今年の夏は去年の何倍も熱くて、私は、湯でたこのようになってのびていた。

「しなちゃん、本当に何もなくて良いの？」

優士が、もう百回くらい言っただであろう台詞を、また言った。私は、これもまた百回言っただと思われる返事をした。

「何もなくて良いの。」

優士のきりつとした眉の下にある目で見られると、私はいつも苦しくなってしまう。私は、あの日助けられた瞬間に分かってしまった。優士は、きつと、ずっと前から、母さんのこと、私が虐待されていることを、知ってしまったんだ。その目は、本当のことを見抜いていたんだ。やっぱり、優士に嘘はつけないな…

「僕、おじさんが蒸発しちゃってから、様子がおかしいことに気づいてたんだ。言い訳になっちゃうけど、ほんとなんだ。でも、認めたくなかった。あの優しかった桃花さんが、あんな事するなんて、認めたくなくて、逃げてたんだよ。現実から逃げて、一番傷ついているしなちゃんを、見捨てたんだ。」

優士の声は、震えていた。優士は心が優しいから、いつも自分ばかりを責めて、苦しむ。

「優士は悪くない。」

私は、思ったことをそのまま口にした。優士が目を丸くする。

「母さんはね、人前では良い人を演じていたんだよ。気づかなくても、しょうがないよ。母さんは、嘘をつくことをなんとも思っていない人だからね。」

私は何だか悲しくなった。

「私のことを可愛がってくれたのは、もう赤ちゃんの時で終わり。今でも覚えてるよ。初めて叩かれたのは、保育園に入園する前くらいだったかな。母さんが私を保育園に入れたのも、小学校と中学校に行かせてくれたのも、たぶん私が邪魔だったから。母さんは、外でいろんな事をしたかったんだと思う。でも、ストレスを発散させるのに、私は必要で、私は、そのためだけにある、ただの道具なんだ。」

優士が眉をひそめて私を見ている。きっと、退いてるんだろうな、こんなこと言う私に。

「私は、存在してもしなくてもどっちでもいいんだって、よく思うんだ。死んだって、誰も悲しんでくれる人なんかいないんだよ。きっとみんな可哀想だ、残念だって言うけど、心からそんな風に思ってくれる人なんて、どこにもいな……」

フワッと優士の匂いがした。優士の両腕が、私の体に回されていた。私の思考は、優士が突然とった行動よりも、優士のあの懐かしい、私が世界で一番好きな匂いの方を選んだ。ずっと、このままでいたら良いと、私の体の全細胞が叫んでいた。

僕は、胸がキリキリと痛くなった。どうしてそんな事言っただよ……

……しなちゃんは、自分の事をずっとそんな風に思っていたのか？！

「私は、存在してもしなくてもどっちでもいいんだなって、よく思うんだ。死んだって、誰も悲しんでくれる人なんかいないんだよ。きつとみんな可哀想だ、残念だって言うけど、心からそんな風に思ってくれる人なんて、どこにもいな……」

僕は、しなちゃんを抱きしめた。その先を聞きたくないのと、言わせたくないという思いで。しなちゃんの体は薄くて、小さくて、手加減しないとペショって潰れてしまうんじゃないかと思うほどに、軽かった。

しなちゃんの心は、もう誰にも修復できないほど、粉々に砕け散ってしまっただ。十年近くの年月をかけて、しなちゃんの心は、崩壊していったに違いない。

僕はゆっくりとしなちゃんを放した。しなちゃんの目に、涙はなかった。乾いた大きな黒い目が、僕を見ていた。どこまでも続く真つ暗なトンネルみたいで、どこにも、何も映っていない。

「前にも言ったけど、」

しなちゃんを見た。少し乾燥した唇が、ゆっくりと動いた。

「私、優士の側にいて、生きてて良かったって思うよ。」

と、その時、階段を誰かが上がってくる音がした。しなちゃんは、いつものようにベッドに隠れた。僕は、その上から布団をかけて、クッションをたくさんせた。

「ちよつと良いか？」

旭あきひだ。僕はいいよと言って、雑誌を読んでいたように見せかけた。

旭はドアを開けると、僕の前に座った。仕事は早退したのだろうか……。

「今、そこで草田さんに会ったんだ。思依茄ちゃんが家出したらしい。」

僕はドキつとした。

「え、ホントに？」

どうか、しなちゃんがいることに気がつきませんように！

「ああ。優士、知らないか？」

しなちゃんが男っぽい口調になったのは、きっと旭のせいだろう。旭と呼んではいるけれど、一応僕のお母さんだ。僕は、小さい頃から彼女のことを一度も「お母さん」と呼んだことが無い。旭は、お母さんというより男勝りなお姉ちゃんという感じで、二年前に父さんが死んでからも、僕たちは姉弟みたいな感じで気軽にやってきた。「僕は、何も聞いてないけど……。」

不審に思われない様に気をつけながら、僕は雑誌を閉じ、座り直した。旭が、そうかと言って辺りを見回した。僕は、彼女の目を追いかけた。

「そつえば久しぶりだな。こうやって座って優士と話するのは。」

旭がにこつと笑った。僕は彼女を見ると、どうして宝塚に入らなかつたんだろうと思う。絶対男性役にピッタリなのに。

「優士、少し話があるんだが、聞いてくれるか？」

旭が、真剣な顔で言った。僕は少し考えたが、覚悟を決め、頷いた。

「思依茄ちゃんのことなんだ。」
「やっぱ……。」

私は息を殺して、優士と旭さんの会話を聞いていた。

私達は、お互いのお母さんのことを下の名前にさんを付けて呼んでいる。二人がそうして欲しいと言ったからだけど、二人ともおばさんと呼ぶには相応しくないのです、違和感はなかった。

「しなちゃんが、どうかしたの？」

残念ながら姿が見えないので、私は声だけを聞いた。

「これはずつと前から思っていたことなんだが、思依茄ちゃん、虐

待を受けてるんじゃないのか？」

低い、少しハスキーな声をしている旭さんが、静かに言った。

「え、どうして？」

優士は、動揺したらしい。声だけで分かる。唐突にそんなこと言われたら、誰だつて動揺するだろう。

「この間帰ってくる時に、ポストの所に立つてる思依茄ちゃんを見たんだ。あっちは気づかなかったみたいだけど、その時けっこーたくさん腕とか顔に傷があるのが見えたんでね、そう思ったんだ。」

私は思い出した。部屋に閉じ込められる前日の夕方だ。私はあの時以外、旭さんが帰宅するであろう時間帯に、外に出ていない。少し間があいたが、やがて優士の声が聞こえてきた。

「学校の部活で、怪我したんじゃないかな。」

ほとんど何でも器用にこなす優士だけど、嘘をつくのはものすごく下手。これも、昔からだ。

「思依茄ちゃんは、部活に入っていないはずだけどな。」

旭さんが、優しく言った。優士は、旭さんのこういう優しい所を、ほとんど全て受け継いでいると思う。

「…どうして、怪我を見ただけで虐待されてるんだって分かるの？」
優士が参りましたという感じで言った。旭さんの次の言葉に、私は思わず声を上げそうになった。

「私が、そうだったからな。」

「え?!」

優士が動いたような音がした。

「小さい時、お父さんもお母さんも死んじゃったから、遠い親戚のうちに引き取られたんだ。でも、私は邪魔者扱い。そこのおじさんもおばさんも、若かったこともあるけど、あまり子供に関心が無かったんだ。私はストレス発散の対象になった。私が中学を卒業して高校に入学する時、お互いに浮気をしていることが分かってね、二人は離婚したんだ。まあ、運良く寮制の高校だったから、住む所には困らなかつたけど。一年生の終り頃、その高校の理事長が私の事

を知って、女性の理事長だったんだけど、養子にしてくれた。そういう事をとても大切に考える人だったからね。もし母さんが私を養子にしてくれなかったら、私はあの人と出会うことはなかったよ。」

私は、その話を聞いてとても驚いた。
でも、おじさんのことは今でも覚えてる。ハーフだった優士のお父さんはとってもカッコよくて、私は大好きだった。旭さんが十七歳の時に結婚して、その翌年に優士が生れたんだと、小学生の時に優士が話してくれたことがあった。

私は、また外の音に注意深く耳を傾けた。

僕は、始めて母さんのことをちゃんと知ったような気がした。少し、嬉しく思った。もう、しなちゃんが今ここにいる事を、告白してしまいたいと思った。旭なら、分かってくれる。

「旭、僕はどうしたらいいんだろう。」

でもとりあえず今は、言わない事にしておこう。旭の目が、僕の方を見ている。その目が、僕を通して後ろにあるベッドを……………その中のしなちゃんを見ている様な気がして、僕は緊張した。

「それは、自分の気持ちじゃないかな。私はどうしてもあげられないけど、優士が思依茄ちゃんを大切に思うなら、守ってあげなよ。」

優士がいる事で、思依茄ちゃんは生きてるのかもよ。」

僕はその言葉を聞いて直感した。この人は、ここにしなちゃんがいることを知っている。

「私も、その時親友だった男の子のおかげで、今こうして幸せに生きてるしね。」

パチッと片目を瞑ると、旭は立ち上がって部屋を出ようとした。

「それともう一つ。」

僕も立ち上がって、旭の背中を見た。

「優士にとって思依茄ちゃんは何なのか、早めに気づいてあげなさい。」

旭は、初めて母親らしい口調でそう言った。階段を降りていく音が小さくなり、その後玄関のドアが開く音がした。また、仕事に行ったのだろうか。

「プハーツー!!」

僕がOKの合図を出すと、しなちゃんが汗びっしょりになって、布団の中から飛び出してきた。僕は扇風機のコンセントを繋ぎ、しなちゃんの前に置いて固定してあげた。しなちゃんが気持ちよさそうに目を閉じる。広いおでこが、風にさらされた。

「あゝ!!! 気持ちいいいゝ」

本当に気持ちよさそうに、しなちゃんはずっと風にあたっていた。僕は、そんなしなちゃんが、僕にとって何なのかを考えた。何なんだろう…

「優士、私、一回家に帰ってみる。」

しなちゃんが突然言った。僕は一瞬思考回路がストップした。

「だ、大丈夫なの？」

僕を見たしなちゃんの顔は、なぜか爽やかだった。

「いつまでもここににいるわけにもいかないし、母さんが捜してるからね。」

しなちゃんは立ち上がって、扉に向かった。

「私が危ない時はさ、助けに来てくれたら嬉しいな。」

振返って、しなちゃんが微笑んだ。僕は、しなちゃんが戦いに挑むのを、止める事はできないと思い、

「分かった。」

そう言った。しなちゃんは、壁の向こうに消えた。

第四話 蚊取り線香

母さんは、リビングにあるテーブルの椅子に座っていた。私は、ゆつくりと彼女に近づいていった。

「ただいま、母さん。」

母さんの肩がビクッと動き、ゆつくりとこちらを向いた。目には、涙が溜まっている。よく見ると、テーブルの上には分厚い本が乗っていた。

「どうやって出たの？」

母さんは目の前に立った私に、何の感情も込もっていない声で言った。私は、もう戦うと決心した。怖がったりしない。

「窓から抜け出したんだよ。」

私も、感情を込めずに言った。母さんは、無表情のままだった。目の下に、隈ができている。

「母さん、私はもう堪えられない。」

そんな母さんの目を、じっと見てみた。母さんは、何も言わない。

私は続ける。

「私は、母さんのこと尊敬してた。キレイで、頭が良くて、何でもこなしてしまうから。」

「尊敬？私はあなたにそんな風に思われるようなことは何一つしてないわ。」

髪をかきあげて、母さんが言った。まだ目が潤んでいる。私の涙は、もう一滴も残っていない。

「父さんがいなくなってから、母さんは私を使ってストレスを発散させてた。私は、母さんが辛いんだと思ったから、ずっと我慢してきた。」

私は、真っ直ぐの姿勢を保った。

「でも、私は母さんにとってただのストレス発散の為の道具ではない。私は、私と母さんを傷つけてきた父さんが嫌いだった。私達

を物の様に扱う父さんが、憎かった。」

父さんが出て行ったのは、十年以上も前。私は、少し悲しかったけど、泣かなかった。涙なんて、出なかった。けれど、母さんは、大粒の涙を零して泣いていた。

「でも、今は母さんが憎い。私が必要ないなら、こんな風に言葉を喋ったり、いろんな感情をもって考えたり、思い出ができない様にしてくれば良かったのに……。もっと早く殺してくればよかったのに！」

私は最後の方を、叫ぶように言った。母さんの目が、見開かれている。涙が、頬を伝った。しかし、私は構わず言葉を続けた。

「でも、母さんには感謝もしてる。」

母さんは、両手で口を覆った。

「母さんがいてくれたから、育ててくれたから今の私はここにいる。それに、優士にも会えた。私は母さんを憎んでいるし、母さんに感謝してる。おかしいけど、これが私の気持ちだよ。」

私は、彼女に近づいた。視界に、あの分厚い本の表紙が入ってきた。それを見た時、私の呼吸と心臓が、一瞬止った。私の心に、穴が空いてしまった。

「あ、母さんね、今アルバムを見てたのよ。」

母さんがゆっくりと言った。

母さんが、私の写真を？アルバムを見てた……？！私は、いろいろな感情や思いが、全て奈落の底へ落ちて行くような感覚を覚えた。何にも無くなる。

「思依茄が小さい時の写真。私、この写真を見て、いつからこんな人間になっちゃったんだろう……って、思った。」

一度アルバムの表紙を見やってから、母さんは私の顔を見た。そして、私の手を握った。

「私は、思依茄がこんな良い子に育ってくれて、嬉しい。もう、いつのまにか大きくなってしまった。私は、あなたのことを、一度も見ようとしていなかったのね。」

私は、激しく動揺した。母さん、そんなこと言わないで。私は母さんを憎んでいるのに…。

「あなたのこと愛してるわ。」

私の目が、顔が熱くなる。頬から顎に、何かが流れていく感触がした。

ああ…私にもまだ涙があつたんだ。もう、使い果たしたはずなのに、まだ流れてくる。

「母さん、もう…遅いの。今のその言葉だけで、私の傷は消えない。元には戻らない。私はもう…ここには戻ってこない。」

私は母さんの手を払った。

「さようなら。」

方向転換をして玄関に向かった。その時、背後で椅子の動く音がした。

「どうして…？」

母さんの、非難するような涙声が聞こえた。私は、歩みを止めた。

「どうしてみんな私から離れていくのよ！孝介さんも、御前さんも………思依茄も。」私の体が、素早く反応した。この感覚は…

「どうしてよお！！！」

ゴッ…！！

振り向いたその瞬間に、私は頭が割れたかと思うくらいの痛みに襲われた。片目を開けると、母さんの手には、アルバムがあつた。母さんが、もう一度それを振り上げる。

「私が何をしたって言うのよ！どうして上手くいかないの？！」

何度も何度も私は殴りつけられる。台所に入った母さんは、フライパンを持ってきて、床にうずくまった私の体を叩きはじめた。私は、あまりの痛みに声が出せなくなっていた。

しなちゃんの家の前に立って待っていると、中から誰かが叫ぶ声と、物が床に叩き付けられるような音がした。それがしばらく続き、そして、しーんとなった。僕はそろそろヤバイと思い、玄関のドアノブに近づこうとすると、中から桃花さんが飛び出してきた。泣いている。僕には気がつかなかったようだ。

僕は中に入ると、奥に進んだ。と、リビングの入り口に、しなちゃんが倒れていた。周りには、血が飛んでいる。僕は、凍りついた。

「思依茄！しっかりしろ！」

僕は近づいて、しゃがみ込んだ。頭を殴られたのか、額に血が流れている。しなちゃんは、眠っている時のような安らかな顔をしている。僕はできるだけ冷静になって、こういう時は揺らしたりしない方がよいのだと考えた。

「しなちゃん。」

僕は泣きそうになったが、頭の中に、電話をするという考えが出てきた。

「ゆう……し。」

しなちゃんの目が、細く開いた。僕は驚いて、しなちゃんの顔を見た。

「あ、しなちゃんっ！今、救急車呼ぶから。」

僕は、自分の斜め後ろにある電話の受話器を取った。

119番と旭の携帯に電話をしてから受話器を置き、僕はしなちゃんの横に座った。ポケットに入っていたハンカチを、しなちゃんの傷口に当てた。

「母さんがね……私のこと愛してるって……言ったの。」

しなちゃんが途切れ途切れに喋りはじめた。僕は、何も言わずに頷く。

「勝手だよ、……父さんも母さんも。もう、何もかも終わったけど。」

しなちゃんはそれ以降、何も喋らなくなってしまった。僕は、しなちゃんの涙で濡れている頬を、手の甲でそっと撫でた。その瞬間に

分かった。

今僕は、しなちゃんのことを守りたいと思っている。軽い気持ちなんじゃない。それが、僕の真実だ。

どこからか、蚊取り線香の匂いが漂ってきた。

第五話 想い

清潔な感じのする白は、私の好きな色だ。今、白いベッドに寝ている。病院は、白を貴重にしているから、とても落ち着く。

しなちゃん……

誰かが呼びかける声に気がついた。けれど、私はその声が誰なのか、すぐに思い出すことができなかった。でも、ここが病院だということとは、何故だか分かる。

「思依茄。」

私は目を開けた。そこには、あの優しい性格とは反対の、何もかもを見抜いてしまうような目があった。整った顔が、私を、じっと見ている。

「優士。」

声が変わったように思ったけど、確かに優士だ。目が充血している。

「良かった。上半身だけなら起き上がっても大丈夫だって、病院の先生が言ってたよ。」優士はそう言って、力無くにっこりと微笑んだ。私の好きな、優士の匂いがする。私は起き上がって、フー…と、長く息を吐いた。

「私、一応生きてるんだね。」

私は、何となくそう言った。

「どうして、そんな言い方するの？」

優士が、悲しそうな顔をして、穏やかに言った。私は、優士の優しさで暖かさに包まれて、とても安心して、胸が一杯になる。

「夢を見たんだ。」

私は、優士の質問には答えずに、今でも明確に覚えているその夢を話すことにした。

「母さんが、どこか暗い所にいて、それを見ている私を、私が見てるの。私は、そこで迷子みたいに不安げな顔でさ迷う母さんを助けてあげたいんだけど、なかなか助けられなくて、近づこうと思って

どんどんその暗闇に向かって行くんだ。でも、その時後ろから私を呼ぶ声がして、振り返ると」

私は彼を見た。

「優士がそこにいた。私は、優士の姿を見るまで、このまま暗闇の中に進んだ方が楽になるんじゃないかって思ってたから、きつと優士は死に向かう私を助けに来てくれたんだね。私は、優士の手を握ってから母さんの手も握って、どんどん明るい方に進んでいって…」

…そこで目が覚めた。」

私を見る優士の顔は、何もかもを許してくれそうな、そんな表情をしている。

あの夢は、私に生きると言ってくれたんだろうな…

僕は、何でもなさそうに淡々と夢の話をするしなちゃんが、とても切なく思えた。

僕の心の叫びが通じたんだろうか…？僕は、しなちゃんが気を失っている間中、ずっとずっとしなちゃんの名前を心の中で呼んでいた。「夢を入れたら三回だね、優士が私の命を救ってくれたの。」

しなちゃんの表情が、柔らかくなつた。何も無くなってしまった空っぽのしなちゃんの笑みは、僕を悲しくさせた。

「助けるって、約束したからね。」

僕は椅子をひいて、もっとしなちゃんの側に寄つた。しなちゃんが、ぱっちりとした目で、不思議そうに僕を見た。

「思依頼、聞いて欲しいんだけど。」

僕が言つと、しなちゃんはどうしたの改まっちゃつてと言つて、笑つた。まだ色が戻っていない頬に、笑窪ができる。

「しなちゃんはいつも一人で戦ってるけど、もっと、僕を頼って欲しいんだ。」

ほんの少し間があいてから、しなちゃんは「とっても頼りにしてるよ。」と、ゆったり言った。

「でも、それは『親友として』だよね。」

僕は、しなちゃんのあの姿を見て、心が決まった。しなちゃんに、絶対に伝えなければならぬ。

「僕たちは、ずっと友達として仲良くやってきた。けど、それには限界があると思うんだ。」

しなちゃんが、眉をひそめた。彼女の表情が、みるみる悲しみ一色になっていく。

「…なに…それ…もう私とは仲良くできないってこと？私の家の事情を知ったから、こんなやつとはやっていけないってこと？」

静かにそう言った声が、冷たかった。しなちゃんの声ではないほどに。

「優士は、私が可哀想だと思ってるんだね。私のことを、不幸な子だと思ってるんだね。だとしたら、すごく迷惑だよ。私、そんなことちっとも思ってた欲しくないし、仲良くできないと思うんだったら、それはそ」

僕はいつかの時のように、しなちゃんの言葉を止めた。抱きしめてあげられなかったけど、その代わりに手を握った。しなちゃんの目が見開かれ、手が少し震えた。

「僕は、思依茄の側にいたいんだ。思依茄の心…元通りにならないかもしれないけど、ずっと側にいてあげたい。同情とか、哀れみとか、そんなことで言ってるんじゃない。思依茄のこと、大切に思ってる。思依茄は、僕の中で特別な存在なんだ。」

僕は、しなちゃんの顔を見上げた。しなちゃんは、涙を流していた。嗚咽することも無く、両目からぼろぼろと、止めど無く水滴が零れ落ちる。

泣かないで。そう言って涙を受け止めてあげると、しなちゃんは何度も頷いた。

優士が私のことをそんなふうに思ってるなんて、一度も考えたことはなかった。私の目から、次々と涙が落ちていった。小さい頃は、そんなこと思ったことも無いのに、あの神陸さんのラブレターを優士が読んでいる姿を見たのを引き金に、訳の分からない苦しみが私を襲ってきた。私の中が不安でいっぱいになって、どうしようもない悲しみが込み上げてきた。あれがどういう気持ちなのか、さっぱり分からなかった。優士が私のことを抱きしめてくれた時、単に私は幸せだった。心がフワフワした思いで満杯になった。

「思依茄は、どう思ってる？」

優士の少し癖のある、おじさんと同じキレイな金色の髪が、さわさわと風にそよいだ。優士、いつのまにこんなにカッコよくて、背の高い男の子になったんだろう？私は、彼のことをどう思っているんだろう。

「お邪魔いたしましたぁ〜す。」

私達が声のした方を見ると、とても中学生の母親とは思えない旭さんがそこに立っていた。いつからいたんだろう…。

「とてもロマンチックなお取り込み中大変申し訳ないのですが、少し思依茄ちゃんとお話しがしたいですう〜。」

旭さんは、完璧に今の話を盗み聞きしていたに違いない。私は、今ごろになって真っ赤になった。優士も耳まで赤くなって、口を尖らせながら少し離れた窓辺に向かった。旭さんを見ると、怖いほど満面の笑みを浮かべていた。

「あ、あの…」

旭さんが片目を瞑る。彼女はウインクが上手い。

「まあ親公認という訳で、いいんじゃないかねえか。」

シシシッと彼女は意地悪く笑った。しかし、すぐにまじめな顔になった。

「それは置いて。思依茄ちゃん、君のお母さんはさっき逮捕されたよ。」

私は、もう予想がついていたことなので、特に驚きもせず頷いた。旭さんは、私を取り乱すと思っていたのか、少し安心したような顔になった。

「思依茄ちゃんは施設に行くことになるけど、大丈夫か？」
私は頷いた。

「会いに行くから、元気にしてるんだぞ。」
そう言つて旭さんは笑つた。

もう何も望まない事にした。これ以上望めば、きっと罰があたるだろう。私のことを心から心配してくれる人が、二人もいる。私の心の傷口が、少し閉じた。安心感が、心を覆う。

「では、私は退散しますか。お二人さん、ごゆっくり。」

そう言いながら、旭さんは白いドアの向こうに引つ込んでいった。私達はお互いの赤い顔を見合つたが、すぐに吹き出してしまった。優士との出会いは最高の喜びだと、私は心から思った。この先に続く私の道が、宝石の粉でも散りばめた様にキラキラと光つて、私を魅了していた。

エピソード

1077...1077...1077.....

僕はぶつぶつと呟きながら、数字がびつしりと並んだ紙から、少し離れた所に立っていた。そして、一・七の視力をフル活用して、1077を探していた。この学校に入学する為に、僕はずっと頑張ったのだ。無ければ困る。まるで誰かが用意してくれたような、澄み切った空がどこまでも広がっていた。緊張で心臓が潰れそうになる。「あ！」

この場所についてから約十分後、僕は、何列か並ぶ数字の列の右から三番目・上から十五番目に1077を見つけた。嬉しさが、じわじわとこみ上げてきた。

「優士ー！！」

後ろからガバアッと何かが飛びついてきた。僕は少しよろめいたが、何とか踏ん張った。

「ビックリした。人がせつかく喜びをかみ締めてたところなのに。」

僕は後ろのその人を振り返って、ニヤッと笑った。その人は僕を放してしばらく呆然としていたが、やがて笑顔になり、やったね！と言って手を叩いた。

「良かった！本当に良かった！」

その嬉しそうな表情に、僕の喜びは何倍にもなった。

「私、古座巳 優士の入学試験の結果は、合格でありました。そこらはいかがでしたか？」

僕は彼女の顔を見た。彼女は旭のようにウィンクをして、僕の真似をした。

「私、草田 思依茄も、先ほど合格という結果を見てまいりました。」

しなちゃんの花笑みが、更に輝きを増した。僕たちは互いにおめでと

うと言って、笑い合った。

「さ、行こう！」

僕が書類を受け取るや否や、しなちゃんはそう言った。そして僕の手を握り、走り出した。

僕は、今とても幸せだ。何もかもが上手く収まったわけじゃないけど、これからきつと、数え切れないくらい楽しいことがあるんだ。僕としなちゃんは、それを信じている。

春が始まりだした。

エピソード（後書き）

大分前に書いたもののなのでかなり色々無茶してますね（苦笑）
お見苦しい点が多々あったと思いますが、最後までお読みいただき
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5065d/>

できれば、もう一度

2010年12月29日02時40分発行